

## 二〇〇三年 小屋掛顛末記

A+U 森兼設計室 森兼三郎

二〇〇三年四月頃、徳島城博物館学芸員の小川さんから、阿波の伝統芸能や伝統文化を子供達に体験させる事業の申請にあたり、何かいいアイデアはないかと相談を受け、人形浄瑠璃を体験させるなら、小屋を掛けて野舞台でできたら楽しいのではと提案したのが今回の発端である。七月の初旬に文化庁から内諾を得て少々ではあるが国から予算もおりるとの知らせを受けて、この事業が動き出したわけであるが、できるだけ多くの座や人たちが、利用できるにはどうしたらよいかと考えると同時に、私自身が掛小屋を見た記憶がなく、その資料を探すところから始まった。つまり小屋を建てるという建築的側面と、その小屋で上演するという興行的側面の二つの流れを考える必要があった。

次は材料の調達である。ナルは最近目にする機会も少なくなつたが、田畑で収穫した稲や野菜を干したり、建築現場の足場にも使われる。筵や菰も、農家の庭先に広げて豆類を干したり、作業場の敷物にしたりと以前はよく見かけたものである。が、現在は足場は鋼管を使うことが多くなり、米の乾燥は乾燥機に、筵や菰はビニールシートなどにとってかわり、民芸用など一部を除いてほとんど作られていない。以前に使っていたものが納屋の隅に残っていないか、知り合いの農家にあちこち声をかけて、なんとか無償で借りる約束をとりつけることができた。しかし、大量のナルと筵が必要のため、何軒もの農家をまわって借りることになるために、返却時にやっかいであり、トラブルが発生する可能性も含んでいた。そんな折、東京理科大の川上氏より、淡路で借りられる可能性があるとの連絡をいただいた。川上氏も同行してくださり淡路に向いて趣旨を説明すると、すぐに快諾を得ることができた。

もう一方の興行面であるが、子供体験教室が十一月二十二、二十三日の二日間の日程であったため、二日間限りで取り壊すというのが一番の気がかりであった。そこで徳島市内に籍を置く全ての人形浄瑠璃の競演への参加を募った。予算の都合上、費用は自前でお願いしたにもかかわらず、十郎兵衛座が競演日と十郎兵衛屋敷での定期公演日が重なって都合がつかなかった以外、七座全てが喜んで参加したいと返事をしていただいた。そこで各座長、関係者で実行委員会を発足して、子供体験教室の指導もすべての座が担当することに決定した。ここで興行的側面は人形座に引き受けてもらうこととなり、一つ肩の荷が下りたわけである。

人形座の人達も掛小屋は初めての体験で、その上、普段の活動は人形座それぞれ独自の活動をしており、市内の七座が一同に交いして何かをするということが初めてなら、自ら興行し、舞台を進行するというのも初めてのことで、また、突然の降って湧いたような話と日程的に余裕がないこともあり、始めのうちはギクシャクとしていた座も、夜、徳島城博物館の和室に集まり、実行委員会の打ち合わせを重ねる毎にまとまりが見え、本番に向けて眼が輝きだした。この人達に快適とはいかないにしても、早く上演できる舞台を造らなければというプレッシャーを感じ始めたのもこの頃である。どんな要望も取り入れて舞台を造る決心をした。

人形座が必要とする小屋を掛けるための材料は、ナルが約三百本、筵や薦類が約三百枚ほど必要となった。筵や菰は淡路で必要な分全てを借りることとし、ナルは淡路にあるだけでは足りないのので、地元の鉄工所と農家で借りることとなった。これで建築的側面の材料調達は何とか見通しがついた。



公演日が迫って、いよいよ小屋を掛けることになり、材料も鉄工所や淡路から運び込まれ、床を張るために購入した材料も揃い、予定の工程通りに順調に作業が進んだ。小屋も立体化すると、朝夕散歩する人も立ち止り、「一体なにができてるんで？ふーん小屋掛けでー楽しみやな」という声が多く聞こえるようになった。

舞台前の棧敷席（ます席）も、ポランティアの人達によってほぼ完成した。そうした頃に、「私小屋を掛けたことがあるんですよ。」という有井氏が現れた。生き証人の登場で徳島で昭和初期に盛んに掛けられていた小屋組みの大きな特徴が判ることになる。

つづく